

「ベトナムの風に吹かれて」作品紹介

ベトナムで日本語教師として働いていたみさおは、ある日父が亡くなった報せを受け故郷の新潟へ戻る。そこで見た姿は、認知症がひどく進行していた母シズエの姿であった。父の死さえも理解していない母の状態を見て、みさおはベトナムに母を連れて行き二人で暮らすことを決断する。二人暮らしはもちろん、シズエはベトナムの地に慣れないもののベトナムの人々との交流もあり、みさおとシズエの表情には徐々に笑顔が増えていったが、ある出来事を境に状況は徐々に暗転していく。

日本・ベトナム合同製作映画で日本では 2015 年公開。

監督は大森一樹、原作は小松みゆきの同名小説。

作品の舞台ベトナムについて



ベトナムは、日本から南西へ約 4000km、直行便にして約 5 時間の場所に位置し、人口約 9370 万人を有する東南アジアの沿岸国です。首都はこの映画の舞台でもあるハノイ。一年を通して比較的温暖で雨も豊富に降ることから農業が盛んに行われている農業国親日国としても知られ、日本へのベトナム人留学生は国別で第 2 位を占めている。

チェオ(Chèo)について

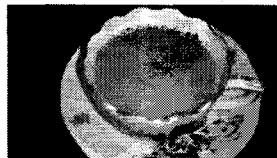
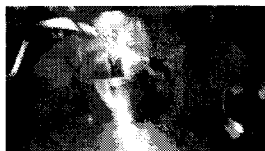
作品中、「チェオ」というベトナムの伝統的な歌舞劇が登場する。この「チェオ」は、北部の紅河デルタ(農村地域)地区で古くから上演されているもので、民話を基にしたストーリー、舞踊、歌唱、メロディの無い台詞、そして演劇と歌唱を効果的に盛り立てる伴奏、これら5つが一体となっていることが特徴といえる。



西洋のオペレッタを想わせる絶妙な軽妙さや、現代の演劇・ミュージカルにも通ずる劇中の歌唱・演舞の効果的な使用、そしてベトナムらしさを存分に感じさせる特有のペンタトニック・スケールを用いた楽曲は、近頃「舞台芸術」として大きく評価され、ベトナム国内のみならず海外からも注目を集める存在になっている。

ーコラム ベトナム式コーヒー 淹れてみたー

ベトナムはアジアでも屈指の農業国で、特にココナッツやマンゴー、カシス、パッションフルーツといったような果物の生産が盛んに行われています。そしてその果物の中でも注目したいのがコーヒー。意外にもベトナムはコーヒー豆の収穫量世界第2位というコーヒー大国なのです。そんなベトナムには、やはり独特のコーヒーの文化があり、パーコレーターのバスケットのような形をしているフィルターで淹れ、コーヒーを淹れる前にカップにコンデンスミルクをこれでもかとぶちこみ、甘ったるくして飲むのがベトナム流。



甘い！甘い！！ただ、謎のトロトロ感が癖になります。コーヒー牛乳を凄まじく濃密にした感じ。美味しい....

このあとブラックコーヒーをベトナム式フィルターで淹れてみましたが、フレンチプレスで淹れたような感覚の味でとても美味しかったです。深炒りの豆でぜひ。

